

植民地朝鮮における学歴主義への心像

ヒアリング調査による青年期の記憶の分析を中心に

金鉉哲 (韓国青少年開発院)

1. はじめに

最近、韓国では、歴史研究においてヒアリング調査がひとつの流れを成しており、また生活史に対する関心も高まっており、教育研究においても、同じ傾向が見られる。

ヒアリング調査によるデータに関しては、その信憑性や客観性の問題が浮かび上がりがちであるが、人々の記憶の中に残っている歴史的経験は、文字化した、いかなる資料よりも生々しい歴史的事実を教えてくれるし、そこから様々な歴史記録や文書の誤りを発見できるし、公式の記録や歴史的事件の具体的事例をも確認できる。もちろん時間の流れとともに対象者の記憶の混同あるいは錯覚、時には当時の状況に対する判断の誤りや情報の歪みはありうる。しかし厳密に言えば、あらゆる歴史の記録に歪みや誤りの可能性は十分考えられる。もっぱらより多くの資料をクロスに検証することによって、客観的事実により近づくことができる。

さらに、口述データが根本的に客観性を欠いているわけではない。もし記憶の歪みや誤りがあったとしても、それを資料から取り除くことができない。その真偽を明らかにすること自体が歴史研究に重要なテーマとなり、時には記憶の歪みや誤りのもつ歴史的意味合い、たとえば、意識や感情などの有り様を明らかにする手がかりとなりうる。また歴史の場面を絵画的に再構成するに決定的役割を果たす。公式の文書などからは見出すことのできない日常史、意識、アイデンティティ、感情、生涯史などのテーマを研究する際、ヒアリング調査のデータは必要不可欠である。

もうすでに再生できない、失った生々しい歴史はこの世から遠ざけてしまい、植民地の時代においても得られるデータは、植民地期半ば以降に限られる。

最近では、様々な分野でのヒアリング調査が行っている。とはいえ、いまだ教育史研究においては、一步を踏み出したばかりである。今まで植民地期の教育に対する研究の蓄積はかなりあったにもかかわらず、いまだ日常のことや教育に関する韓国人たちの意識、アイデンティティ、感情などいわゆる心性に対する研究は少ない。この時期の教育に関する研究は主に支配と統制、抑圧と差別、そしてそれに対する抵抗などが主なテーマとして扱われてきた。

この研究では、抵抗か順応かとの二項対立の図式では説明できないほど日常自体が苦であった当時の韓国人に、果たして教育はいかなるものだったのか、そして彼/彼女らはそれをどのように受け入れていったのか、抵抗と順応、欲望と挫折、そしてアイデンティティ、混同など、いかなる心理あるいは心性が、当時の韓国人たちのこころや意識の中で交差していったのか、彼/彼女たちの対応や戦略はどうであったのか、伝統教育と近代教育に対する意識あるいは心性の変化はどうであったのか、当時の教育は韓国人の暮らしにどのように影響し、その影響はジェンダー、学歴、階層、職業、宗教などによっていかに違ったか、という問題に注目し、当時の若者たちに微妙なニュアンスを帯びていた学歴主義というものが、どのように歪み、その根を下ろし始めたかを明らかにしたい。また「構造と日常」あるいは「構造と意識」という側面から植民地期教育が人々の意識と生活にどれほど影響を及ぼしているかを明らかにするのが、この研究の狙いである。

2. 先行研究・研究方法

最近の研究では、日常、意識、アイデンティティ、文化などが新しいテーマとして注目を集まっている。当時の初等教育機関である普通学校の量

的發展の原因を韓国人たちの教育に対する積極的な要求から探り、当時の教育の脱植民性を見出そうとする研究や、少ないといえども当時の学生たちの文化や意識をテーマとした研究などが、一つの流れを成している。とはいえ、いまだ教育史研究では、日常のことや意識などをテーマにした研究は少ない。現在、ヒアリング調査方法を用いた研究が、関心を集まってはいるが、いまだ調査の対象者数や範囲は非常に限られており、多くの場合、ヒアリング調査データが研究の補充的なデータとして使われた。

この研究は、ヒアリング調査データを主な史料として用いた。調査の対象者は植民地期に中等教育以上の教育を受けた人々である。調査の内容は、個人の生涯史あるいは家族史からはじめ、初等教育から高等教育までの経験、そして職業経験や教員の経験であり、ジェンダー、地域、階層、職業、学歴、宗教などの変数を考慮した。ほかに、当時の雑誌に載っている記事、統計資料、様々な公式文書などのデータを用いた。

3. 研究結果

植民地下の若者たちにおいて、立身出世という欲望と植民地という社会状況は、常に悩みや葛藤の種となっていた。多くの人々（主に高学歴者）がインタビューに応じてくれなかったのは、当時の若者たち心性をある程度語ってくれるだろう。その中でも、植民地期の末期に至るまで教育は量的の發展を増し、学歴主義への心像は次第に社会の特徴として浮上する。とはいえ、若者たちの心の中には欲望と挫折が常に交差する。

初等教育の量的増加とともに、中等教育も増加を増し、受験ブームという現象も起こり（受験産業ともいえる現象もあり、日本で流行っていた中学校講義録の広告も見られるが、同じ時期に日本で起こっていた受験ブームとのおよくなるには様々な制約があった）、誰でも受験競争を勝ち抜かないと出世できない、という意識が高まる一方、他方では、挫折に挫折が重なり、それが受験ブームの冷却装置となっていく。それゆえ、植民地期

の末期に近づくと、さらに太平洋戦争期に入ると、次第に消えてゆく風景がいくつかある。まず苦学や同盟休学といった現象が消えていく。もともと苦学で立身出世したものは、珍しかったのであるが、時間の流れとともに、富が学歴を決め手となってゆく。特に、女性教育においては、階層と学歴は濃密な関係となる。受験は、非常に限られた競争となる。貧しい家庭を背景にしては、いわば銘柄学校への進学は出来なかったのである。

その中で、師範学校は特別な役割を果たす。

（植民地朝鮮の場合、高等師範学校はなく、師範学校を卒業すると、初等学校の訓導となる）師範学校では学費がなかったゆえに、まったくそうとは言えないが、誰でも入ることはできた。こういう傾向は、解放後も続いた（その中で現在のソウル大学師範学校出身は、大きな学閥をなす）。初等教育の量的増加につれ、次第に訓導に対する需要も増加し、太平洋戦争が始まると、さらに増加し、師範学校の速成科や教員養成所などが設立され、教員の大量生産が施される。しかし、教育の量的増加にかかわらず、国民総動員体制の中で学校教育は失踪してしまふ。

当時の教育が量的増加を増していても、地域の差はかなりあった。京城（ソウル）はいうまでもなく、第2の都市であった平壤（ピョンヤン）も教育熱においては目立った地域であったが、平壤の場合は、特にキリスト教と教育の間では、根深い関係があった。それに比べて、他の都市では、ミッション・スクールはあったものの、宗教との関係はそれほど強くはなかった。やはり教育は都市を中心に発展することであるが、都市の学校に通っていた学生たちには、農村の出身がかなり多かった。さらに、農村出身の学生たちの中では、経済的に余裕のあるものが都市出身より多かったようである。

この時期、学歴主義は若者の心の中で確かに刻み込まれた。その中で、挫折と欲望は常に交差し、あるトラックは階層を媒介して閉ざされており、同時に師範学校は新しい突破口となる。とはいえ、それが欲望を補うほどではなかった。